

米国IBM環境配慮製品担当マネージャー June Andersen

IBMでは、使用済み製品のマネジメントの戦略として、質量を減らし、最初から再利用を前提とした設計にし、リサイクルし易いようにしていくことを目指している。1980年には2GBの容量のデータ記憶システムが、ミサイルキャビネットほどの大きさだったが、19年後の1999年には72GB分のデータが手の中に入る大きさのハードディスクドライブに入るようになった。これは正に、小型化によってマテリアルの使用量を減らすという努力の賜物だと言えよう。PCの分野でも、PC300GLとNetVistaX40を比べるとNetVistaは重量が半分、高さは3分の2、奥行きが4分の3となっている。

もう一つ努力している分野は、再生プラスチックの使用量を上げるということである。この2年間に再生プラスチックの使用量を13%増やしている。再利用という点では、システムの寿命を延ばすために再利用を図る、あるいはパーツそのものを再利用するということに分けられる。

IBMでは、環境的に健全なコスト効率の良い製品に対しては、使用済みの際に色々なオプションを提供していくことを一つの戦略として考えている。実際には、営業活動の売上げの高い市場、そして需要の高いところから優先的に回収していく、というようなオプションを展開してきた。また、責任を共有するという考え方もサポートしている。つまり、各プレーヤーが環境面に効果の高い回収というオプションを得るためには、その面での責任を分担する必要があるということである。



一番難しいのは、消費者にこうしたオプションをどのように提供するのかという点である。PCは何百万という家庭に普及しており、これを回収する、あるいはユーザーに運び込んで貰うということは重要な役割分担となる。消費者向けの回収プログラムということに関しては、12カ国で発表もしくはペンディングとなっている。日本ではまだ現在、計画中の段階である。

IBM内には、環境担当のグループがあり、このグループがワールドワイドにマテリアルの回収グループと連携して、全体的なマネジメントを全ての拠点において統合している。IBMでは、材料のリカバリーセンターで回収したものが、デザインの方にもフィードバックされる。つまり、リカバリーセンターで、どういうものが返ってきたかを見て、その情報を設計者の方に回すことによって、環境配慮製品の今後の設計に役立てて貰う仕組みを築いている。

IBMでは、製品の処分に関して、何段階かのレベルを設けている。レベルが高ければ高くなるほど、潜在的な製品の回収価値が高くなる。また、リユースやリサイクルができる可能性が高いということは、ユーザーにとっても、環境にとってもメリットが大きい。マシンをただ単に分解するというだけでなく、出来るだけIBM社内で使うか、外部に売却していき、全くリユースできないということであれば、今度は材料のレベルで回収するということをやっている。IBMでは、こういったレベルを設けることによって、環境へ配慮し、回収の価値を高めようと努力を絶えず続けている。

2つ目のオプションとしては、パーツサプライがある。IBMではこの部品供給システムが整備されており、同システムを通じて世界的にクリティカルパーツは何かを特定している。

世界的に再生がどれほど行われているかを見ると、昨年度は55万4千台のパソコンが再生された。そのうちの80%はアメリカ国内、16%がヨーロッパ、そして4%ぐらいがアジア地域で再生されたものであった。

最後にリサイクルについてだが、IBMはディマニュファクチュアリング(Demanufacturing)、つまり分解のシステムも確立している。一番大きいディマニュファクチュアリング工場はニューヨークのエンディコットにある拠点で、ここがアメリカ国内で回収される全ての製品の分解作業を受け持っている。ちなみに日本IBMの場合は、藤沢と大阪にディマニュファクチュアリングの工場がある。IBMでは、廃棄量を極力減らす努力を続けており、最終的に埋め立てに回さざるを得なかった量を昨年、95年の7%から3.8%にまで縮小させている。IBMでは、何%廃棄に回すかというワールドワイドな基準やターゲットを設けており、世界各地のリサイクリングセンターが、その設定目標を達成するために日夜励んでいる。その中で日本のマテリアル・リサイクルセンターは、実に廃棄率0.6%という、極めて低いレベルに到達することに成功している。

IBMでは今後ともこの面でも改善を継続的に進めていくつもりであり、システムそのものの改良も図っていくことにしている。